様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００５５５

研究課題名（和文）役割理論を適用した日本語現象の語用論的分析および著書作成

研究課題名（英文）Pragmatic analyses of Japanese through the application of Role Theory & Writing a research monograph

研究代表者
尾鼻　靖子（Obana, Yasuko）

関西学院大学・理工学部・教授

研究者番号：６０３６２１４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：役割理論を適用して日本語のポライトネスの分析を前回の科研費をいただいてから断続的に行い、数本の論文を出版したが、それらをまとめ、また新しい分析結果も導入して、一冊の本にまとめた。イギリスのRoutledge出版社にproposal(研究計画書）を送り、そして契約を交わしたのが2019年の3月。そして2020年の3月に仕上げて送った。校正を重ねて、10月に出版された。
海外研究協力者とは、アイロニーについて研究を開始した。1本はJournalにacceptされ、1本は今提出して結果待ちである。研究代表者はそのほかに単著で3本の論文を出版（日本語で）している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語のポライトネスに関して様々な観点から分析がなされてきたが、今回の著書にあるような役割理論を適用して分析した研究はまだ少ない。日本語の敬語やポライトネスストラテジー（方略）は、対話している相手との社会的関係、対話の状況、対話の内容によって、絶えず変化する。それを包括して理論化するのは至難の業であるが、役割理論（特にシンボリック相互役割理論）でどこまで包括的に捉えることができるか、というのが著書の目的である。また国語学者の主張も海外に伝えたいという気持ちもあった。アイロニーに関しては、敬語が含まれるアイロニーは従来のアイロニーの定義に当てはまらないことが分かり、大きな波紋を投ずると思われる。

研究成果の概要（英文）：A research monograph has been published, entitled "Japanese Politeness: An Enquiry" in October 2020 by Routledge, England. This is a collection of works achieved from the previous KAKENHI through this period, with new chapters added.
Concerning the topic on 'irony', my research associate and I have worked on two papers, one of which has been accepted by LINGUA and the other waiting for referees' feedback. I have also published three papers in Japanese concerning the manipulation of Japanese honorifics in irony and challenging the senior.

研究分野：語用論

キーワード：敬語　ポライトネス　アイロニー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）Brown & Levinson (1987)の face theory（公共への自己のイメージ）が大きな反響を呼んでからは、賛否両論ともにポライトネス研究は大きく発展した。そして次の大きな波は Eelen (2001)の discursive politeness（インターラクションの全体を眺めてポライトネスを判断する）の提唱によって、ポライトネスは対話の中で判断することで適切さが明らかになるという方向が主流となった。しかし、それ以降ポライトネス研究は理論構築よりも個々の対話を調査するという傾向があり、また Brown & Levinson のストラテジーは文化によって異なるという指摘があってからは、個々の言語におけるポライトネスの特徴に焦点をおく研究が増えていった。ある意味においてポライトネス研究は理論構築の面では低迷期を迎えているといえる。

（２）一方、ポライトネス以外の語用論研究は、アイロニーが注目を浴びるようになった。しかし、これまでのアイロニー研究は英語の分析が中心で、話者の発話と話者の意図との間に矛盾や逆理が見受けられる場合をアイロニー生起の基本としている。つまり、二つの命題の逆説がアイロニーの引き金となる、と定義するのが通説である。一方、敬語を使ったアイロニーは、不必要な敬語を使ったり目下に敬語を使用したりするとアイロニーが生起しやすい、という研究発表で留まっており、では敬語と命題の関係はどのように捉えるのかという点まで言及した研究は今までに存在していない。

（３）「～てくれる」という助動詞の扱いは、従来「相手が自分に何等かの利益を施した」結果、その受け手が感謝の気持ちを持って「A さんが～をしてくれました」と発話する、というのが通説になっている。そして、A さんが話者に対して行動のベクトルが向かうという解釈が一般的である。しかし、実際の対話では、「よくも～してくれたわね」と相手をなじるときにも使うし、「こうしてくれるわ」と相手にベクトルを向ける場合にも使うことがある。後者の場合は、「くれる」行為者は話者であり、利益どころか損害を与える状況である。一般に信じられている（そしてそのように研究で発表している）通説に疑問を投げかけ、「～てくれる」はどのように捉えれば様々な語用論的意味を包括できるのか、というのが研究のきっかけとなった。

２．研究の目的

（１）上記の項目（１）に関しては、これまでの研究の積み重ねがある程度まとまってきたので、著書にして出版しようと思った。イギリスの Routledge 出版社と何度かやり取りを重ね、2019 年 3 月に契約を結んだ。これまで出版されたいくつかの論文に手を加え、新たにいくつかの章を執筆し、単語数 8 万５千をめどに完成することになった。ポライトネスの骨格を成す軸として適用したのが Symbolic Interactionism（SI シンボリック相互作用論）という役割理論である。日本語の敬語やポライトネス・ストラテジーは人間関係を考慮しながらもその場の対話者の立場（例：会議の進行係）も原因となって発話の在り方が決まる、という点から、対話の場面によって役割が変化する、という SI の主張は日本語分析に適切なツールであると判断した。そして SI を軸に日本語のポライトネス現象を分析するという理論の構築を計ろうと試みた。また、従来日本語のポライトネス研究がまだ及んでいない分野（敬語ストラテジー、敬語の由来、敬語の社会的意義）にも範囲を広げ、日本語のポライトネスを総括にまとめるというのが目的となった。

（２）アイロニー研究は今回はじめて取り組んだ分野である。敬語を使用したアイロニーは、上記に述べた従来のアイロニー定義に当てはまらないことがある。つまり話者の発話内容と意図とが同じであっても敬語がアイロニーを引き出す例があるのである。いくつかの例を基に仮説を立てた。

① 敬語が規範的な使用から逸脱している場合アイロニーが引き出されやすい。この場合、相手との人間関係と敬語使用との間に矛盾が起きているからアイロニーが発生するのではないか。
② 敬語が規範的に適っていても、発話の中に敬語世界では不適切であろうと判断される言葉を使うと、敬語と不適切な言葉との間に齟齬が起こるので、アイロニーが発生するのではないか。
③ 相手の敬語を使った発話をそのまま繰り返すことがあるが、元の発話が尊敬体であれば、話者は自敬することになり、元の発話が謙譲体であれば、話者は相手を降格することになる。これもアイロニーのカテゴリーかどうか。

（３）「～てくれる」の語用論的意味はどのようなものがあるのかを調べることになった。いくつかの例を抽出したときに次の仮説を立てた。

① 「～てくれる」「くれる」（以下「クレル」）というのは元々行為の方向だけを示すもので、上位から下位に向かうベクトルを示唆しているのではないか。

② Aという人物からBという人物への行為がBにとって利益がある場合も不利益をもたらす場合もある。その利益不利益あるいは中立によって「～てくれる」の語用論的意味がことなるのではないか。

３．研究の方法

（１）著書の執筆。題名は Japanese Politeness: An Enquiry。参考図書をさらに閲覧しながら、これまでの論文に手を加えたり、新たに章を設けて執筆していった。

（２）敬語を含む発話の例をテレビのドラマ、映画、小説などから抽出した。一方でアイロニーに関する文献の閲覧を始めた。

（３）「クレル」を含む例をテレビのドラマ、映画、小説などから抽出しながら、この研究対象及び外国語における benefactive と名付けられた項目に関する文献の閲覧を続けた。

４．研究成果

（１）著書は 2020 年末に仕上がる予定であったが、2020 年 3 月に仕上がった。校正を数回繰り返し、9 月に全てを送り返し、10 月末に出版された。281 ページの著書となった。内容は次のようになっている。

Part I: Politeness begins
- Chapter 1 - Definition of politeness
- Chapter 2 - The underlying meaning of politeness: How it begins and evolves
- Chapter 3 - Politeness as a social norm, its contingency and discursiveness

Part II: Honorifics
- Chapter 4 -The term ‘polite’ in English and Japanese: Conceptual differences
- Chapter 5 – The origin of honorifics: Distance begins
- Chapter 6 – Understanding honorifics
- Chapter 7 – Variations and derivations of honorific-use: Strategic honorifics

Part III: Politeness strategies
- Chapter 8 – Strategies as the implementation of one’s Role-Identity
- Chapter 9 – Honorific strategies

Concluding remarks.

なお、この著書の執筆中、共著の誘いが Patrick Heinrich 氏からあり、日本語の社会言語学を網羅する目的の Handbook であるが、そのうちの第 19 章(Politeness)を引き受けた。
また、この著書の第 5 章は、新らたに研究したものなので、日本語で論文としてまとめて出版した。

（２）敬語のアイロニーは、従来のアイロニーとは異なり、命題(propositions)を通して生起するものではないと判明した。つまり、敬語アイロニーは、敬語の使用適切さ、敬語の世界と発話内の言葉との相互性が鍵となって起こる。そこで、従来のアイロニーを propositional irony と名付け、命題を経ない敬語のアイロニーを non-propositional irony と名付けた。むろん、2 つの命題の矛盾がある発話に敬語が表れる場合もあり、この場合敬語はその propositional irony をさらに強調することが判明した。アイロニーは大抵の場合否定的な感情を相手に伝えるものであるから、そこに敬語を使ってさも尊重するスタンスを取れば、アイロニーはさらに増加するからである。研究成果として論文を３本投稿した。１本は出版済み、１本は印刷中、１本は結果待ちである。さらにこの敬語のアイロニーを調べていくうちに、目下が敬語を盾に目上に対して応酬する例も抽出できたので、これも論文にまとめ出版した。

（３）「クレル」に関しては、論文１本が出版された。「クレル」は仮説通り、行為の方向を示し、多くの場合上位から下位に向かうという指標がある。そして行為の内容が受け取る側にとって利益をもたらすのか、不都合なことなのか、あるいは単に中立的なのか、という判断によって、相手に伝わる話者の意図が明らかとなる。つまり、

① 話者にとって利益となる行為を相手から受け取った場合、自分を下位扱いにし、相手を上位扱いにすることによって、相手への感謝を表すことができる。
② 話者にとって不利益な行為を相手から受け取った場合、自分を下位扱いにすることでその迷惑度を「クレル」に含蓄させ、相手を批判する意味合いが濃くなる。
③ 利益・不利益がない場合にも「クレル」は現れるが、その場合には行為の方向だけを示す。第三者のことを述べる場合には、話者の視点はこの第三者に焦点を合わせ、そのアングルから第三者の行為授受を記述していることになる。

（４）本研究では、海外研究協力者と共著で著書を出版すると申請書に述べた。これに関して

は、Routledge 出版社と契約を結び、現在執筆中で、2022 年の 4 月末までに仕上がった原稿を提出する予定である。科研費をいただいてから 8 年間に渡って出版した共著の論文のいくつかをまとめ、さらに新たに数章を加える予定で、次のような構成で進める予定をしている。３つのパートから成り、それぞれに主軸となる用語を与えてあるが、それは語用論研究でもっとも言及されている要素を取り入れたものである。その要素に沿って各章を仕上げることにした。研究協力者とは去年から Zoom で共著について何度も話し合い、メールのやり取りも頻繁にしながら執筆を進めている。著書の構成は次のようになっている。

“Socio-Pragmatics of Japanese”

Chapter 1: Introduction

Part I: Indexing
- Chapter 2: Honorifics
- Chapter 3: Greeting formulae
- Chapter 4: Politeness strategies

Part II: Evaluating
- Chapter 5: Auxiliary *-te kureru*
- Chapter 6: Honorific irony

Part III: Relating
- Chapter 7: Joint utterances and participation/(dis)affiliation
- Chapter 8: Fishing in interactional conversation

Chapter 9: Conclusion

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Yasuko Obana & Michael Haugh	４．巻 in press
２．論文標題 Non-propositional Irony in Japanese - Impoliteness behind Honorifics	５．発行年 2021年
３．雑誌名 LINGUA	６．最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.lingua.2021.103119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 尾鼻靖子	４．巻 24
２．論文標題 武装する敬語（２）ー目下の目上への応酬	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西学院大学　紀要「言語と文化」	６．最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾鼻 靖子	４．巻 23
２．論文標題 武装する敬語　－　非命題的アイロニー考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 関西学院大学　紀要「言語と文化」	６．最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yasuko Obana & Michael Haugh	４．巻 ３（２）
２．論文標題 Malefactive uses of giving/receiving expressions: The case of te-kureru in Japanese	５．発行年 2018年
３．雑誌名 East Asian Pragmatics	６．最初と最後の頁 ２０１－２３１
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1558/eap.35239	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Yasuko Obana
2．発表標題 Japanese honorifics and the perception of sarcastic irony - Impolite strategies concealed under affecting politeness
3．学会等名 16th International Pragmatics Conference, Hong Kong（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Yasuko Obana & Michael Haugh
2．発表標題 Honorifics in sarcastic-irony
3．学会等名 4th International Conference of the American Pragmatics Association（国際学会）
4．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Yasuko Obana	4．発行年 2020年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 281
3．書名 Japanese Politeness - An Enquiry	

1．著者名 Yasuko Obana (Chapter 19) edited by Patrick Heinrich	4．発行年 2019年
2．出版社 Routlege	5．総ページ数 486（うち、pp248-263）
3．書名 Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics (Chapter 19: Politeness)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ホー　マイケル (Haugh Michael)	University of Queensland・Professor	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関